

Title	マルコ・ポーロとアレクサンドロス伝説(一)
Sub Title	Marco polo and Alexander romance (I)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.1(499)- 30(528)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルコ・ポーロとアレクサンドロス伝説

(一)

前嶋信

次

目

次

一、アレクサンドロス伝説の流布

二、二本角(ドゥル・カルナイン)という名称

三、ゴグとマゴグの長城

四、マルコ・ポーロの伝えたゴグ・マゴグの長城

五、アッバース朝カリフの長城への遣使

六、サルラーム等の行程についての諸説

一、アレクサンドロス伝説の流布

マルコ・ポーロはその世界誌のなかで、いく度かアレクサンドロス大王のことについて言及している。いうまでもなく、この二人は千六百年ほども時を隔てているし、マルコ・ポーロその人も決して歴史に対して深い知識などは持っていないかった。その大旅行の間に、各地で見聞したことなどを、いわば虚心に語り伝えたのに過ぎないのである。しかしながら、それだけにそれ独自の価値も認められるのであるが、このことについては、すでにヘンリー・ユールが、そのマルコ・ポーロの書の序説の中で、かなりはつきりした考を示している。

「十五歳にして家郷を去ったマルコは、当然のこととして極めて乏しい読書の形跡しか示していないのであるが、若干の伝記小説(ロマンス)を読んだこと、ことにかのアレクサンドロスの伝説的冒險物語に属するものを読んだ証跡がある」⁽¹⁾

マルコ・ポーロとアレクサンドロス伝説

(一)

(四九九)

一

といい、ポーロが、クビライの宮廷に赴く途中、イランを通過する途中で物語ったゴグとマゴグを封じこめた鉄門関の話、アレクサンドロスがダリウス王の娘と結婚した話、ホラーサーンの国境にある「乾いた木」Arbre Sec (またはArbre Sol) の話などは、みなアレクサンドロスの史実とは全く離れた、その伝説物語から来たものであることを指摘している。

ひとりマルコ・ポーロのみでなく、中世を中心に約一千年間にわたり、西洋でも東洋でも、一般の民衆は、空想的なかの伝奇小説の主人公としてのアレクサンドロスを通じて、偉大な征服者のイメージをえがいていたのである。この伝奇小説は、アリストテレスの甥で、大王の遠征に従つたが、王が東方遠征に成功するにつれ、神格化した帝王として振舞いはじめたのに反対したため、ついに殺されてしまつた史家カリステネス Kallisthenes (前370頃—327) の筆に仮託されたものであるが、実際は西紀二〇〇年ころより古くは溯ることが出来ず、恐らくヒジヤーのアレクサンドリアで、とあるギリシャ系の文人が述作したものであろうといわれている。

この一編の奔放な空想を走らせたアレクサンドロス物語は、ヨーロッパ各国でも、またアジアやアフリカの各地でも、早くからそれぞれの言葉に訳出され、まことに広汎な流布を見たので、仙語学、フォークロアその他いろいろの見地から学者たちの注意を惹き、これに関する研究もおびただしく現われている。

一九五六年に故ジョージ・ケアリーの遺著「中世のアレクサンドロス」The Medieval Alexander といふ書物がケンブリジ大学プレスから出版されたが、その巻末のビブリオグラフィーには約一百五十項ほどの挙げてゐる。しかしそだ漏れたもののがかなりあるように思われる。

ケアリーの説くところによると、偽称カリステネスのアレクサンドロス伝は、最初に書かれたものはそのままに伝わらなかつた。そして、時代の経過につれて、いろいろの附加が行われたらしいが、結局、現存の稿本類を分類するといふの

如き四群にわかつことができるというのである。

第一群を代表するものは、パリーの国立図書館稿本部、ギリシャ語一七一一番であるがこの群に属するものとして五世纪のアルメニア語訳本や *Julius Valerius* が西紀二二〇年頃にラテン語に訳した *Res Gestae Aelxandri Macedonis*などを挙げることが出来るといふ。とりわけ後者は中世のヨーロッパ社会に流布し、各地の方言にも訳されたものである。

第二群は、第一群のものに改訂を加えて、伝説をもと史実に近いものにしようと努めたあとがあるもの。やはりギリシャ系のある文人の手になつたもので、偽称カリステネスによるアレクサンドロス・ロマンスの現存するギリシャ語稿本の多くはこの系統のものである。またこの系統からの訳本としては十二世纪または、それ以前ころのブルガリア語のものがあり、ブルガリア語からもロシア語に訳されている。また十四世纪にはビザンツ帝国でギリシャ語の詩物語に書き改められたり、またシリアル語の年代記の中にも取入れられた。

第三群はミュラー稿本 *Müller's MS.* と呼ばれ、パリーの国立図書館稿本部に、ギリシャ語補充第一一三番として保存されているものなどによって代表されている。これは、あるユダヤ教徒、もしくはブルアイ語資料によく通じた人物が、第二群に属するものに増補を加えたものであるが、この系統からはアレクサンドロスの生涯のうち、とくに不可思議な要素を強調したヘブライ語のロマンスが出てゐる。ただし、この中にはいくつか今まで知られなかつた資料からの引用が見られる。また十四世纪ころのセルビア語のアレクサンドロス伝もこの系統であり、さらにセルビア語からグルジヤ語の散文訳が出でている。一六九九年にヴェネチアで印刷された現代ギリシャ語の呼び売り本アレクサンドロス物語も同じ系統のものである。またルーマニア語の散文のアレクサンドロス伝も、右記のセルビア語や現代ギリシャ語のアレクサンドロス物語と密接な関係があると認められている。

第四群では、代表となるギリシャ語稿本は伝わっておらず、現存するのはシリアル語やエティオピア語の訳本や、ナポリ

のレオ大司教が十世紀にギリシャ語からラテン語に訳したものなどが代表的のものである。この系統は第一群に属する立派な稿本をもとに書いて書き改めたものと考えられているが、シリア語散文に訳されたのは六世紀またはその少し前くらいで、原本は中世ペルシア（パフラヴィー）語のものであり、パフラヴィー語のものは、さらにギリシャ語の原典から訳したものであつた。しかし現在ではパフラヴィー語訳本も、ギリシャ語原典も、ともに散佚してしまつたのである。ナポリのレオ大司教は九五〇年ころ、領主カンパニアの侯爵ジオヴァンニ二世の使節としてコンスタンティノープルを訪れたが、その際、偽称カリステネスのアレクサンドロス伝のギリシャ語稿本を発見した。それがまたこの第四群に属するものであつたが、その写しをナポリに持ち帰つた。ジオヴァンニ三世は同大司教に、自分の書庫に収めたいからこの書をラテン語に訳すよう命じたが、こうして出来たのが *Nativitas et Victoria Alexandri Magni* であつた。この書は *Historia de Prelis* と云う名で一般に知られ、中世人がアレクサンドロスの事蹟に親しむにあたり、最も重要な役割を果したものであつたといふ。⁽³⁾

このような偽称カリステネスのアレクサンドロス伝の流布の経路を見ると、マルコ・ポーロの故郷ヴェネチアとアレクサンドロス伝説とはかなり深い関係があつたことがわかる。そうしてみるとポーロが東方に旅立つまでの幼少年時代をかの港町で過す間に、この興味深い英雄譚に親しんだという可能性が充分にあるように私どもには思われる。

しかしフランスのポール・ペリオはこのことについて別様の考を持つていただごくである。彼はそのマルコ・ポーロの書の註釈書の中で大約つきのような考を述べている。

「マルコ・ポーロは十五才ころ故郷を去つて東方に向い、帰国してから二、三年後にその旅行記を口述したのであるから、西洋の文献に親しむ暇はなかつたであろう。彼がアレクサンドロスの事蹟を聞いたのは、もちろん旅立つてからのち、イスラム諸国においてであつた。当時、それらの地方では、ヨーロッパにおけると同様にアレクサンドロスの物語が

流布していたのである。自分の印象ではポーロはアレクサンドロス・ロマンスを読んだことはなかつたが、耳に聞いてはいたものであろう……」⁽⁴⁾

しかし、ポーロが故郷ヴェネチアを出発したのは十五才位の時であり、西アジアのイスラム諸国を旅したのも、その出发の年のことであるから、言葉の不自由な西アジアの旅先きなどよりも、むしろ故郷ヴェネチアで、この伝説物語に親しんだという可能性の方が多いように思われるがいかがであろうか。

偽称カリステネスのアレクサンドロス伝のうち右に述べた第四群に属する中世ペルシア語（パフラヴィー）訳本はネルデケの説によれば六世紀末から七世紀はじめにかけたころに出来たものであるというが、シルヴァン・レヴィやポール・ペリオの説によると、早くも七世紀中ごろにはインドにはいり、バーナ Bāna の「ペルシャ（戒日）王臣」Harsacarita に影響をあたえ、alasa Caṇḍakoṣa とその中で呼ばれているのはアレクサンドロスその人であろうという。またハルシヤ王から厚遇を受けた唐の玄奘三蔵の大唐西域記に見える西女国のことなども、やはりアレクサンドロス物語の影響としか考えられぬところである。⁽⁶⁾

一一、一一本角（ドウル・カルナイン）という名称

パフラヴィー語訳のアレクサンドロス物語が七世紀中葉にインドに伝わったかどうか、この問題は別としても、回じパフラヴィー語訳本からシリア語に訳されたものがあったことは、すでによく知られた事実である。

このシリア語への重訳本から、九世紀にはアラビア語に訳出された。つまりギリシャ語—パフラヴィー語—シリア語—アラビア語という順に訳されていったが、このアラビア語訳（第四群に属するもの）に、十四世紀から十六世紀に至る間に、やわらに第一群に属するテキストの内容を加味したエティオピア語のアレクサンドロス伝が出来た。その原典となつた

九世紀のアラビア語本は散佚したけれども、エティオピア語本の方は現存する⁽⁷⁾。

東洋諸語のものとしては、これら以外にアルメニア語訳本や、ヘブライ語訳本があり、またイランにはフィルダウシーのシャー・ナーマ（王書）やニザーミーのハムサ（五書）をはじめ、多くの詩人が韻文化したものがあり、またミニアチユール（細密画）画家たちはこの物語に取材した無数の作品をものしている。

アラビア語の散文では、イラン系の文学者アッ・サアーリビー Abū Mansūr ‘Abd al-Malik ath-Thālibī（九六一—一〇三八）がその世界史の一部として述べたものがあり、やはりこの物語を基としている。

フィルダウシーとサアーリビーは同時代人で、どちらもイランの東部ホラーサーンの人であるが、前者は近代ペルシア語の韻文で、伝説世界のアレクサンドロスの事蹟を歌いあげ、後者はアラビア語散文で、やはり同じ主題を敍述している。しかし、両者を比較して見ると、その内容にもかなり相違があるのである。時代と場所とを同じくする二人の学者が、同じ主題について述べていながら、内容を異にするというのは、恐らくそれぞれ独自の資料に拠っているためであろうが、そのころ、種々の系統の資料がかの地方で行われていたらしいことが想像されるのである。

アレクサンドロス伝説は中世のヨーロッパや西アジア方面で行われていたのみでなく、もとと広汎に普及したらしい。ユールによると、インドネシアやマラヤ、タイなどにもはいつているという。ちなみに十六世紀に極東まで来たポルトガル人は、カンボジヤの広大な廃墟（アンコール・ワットなどであるう）をアレクサンドロスが建てたものと思いこんだということである⁽⁸⁾。

アラブ世界では大王のことを、普通、ドゥル・カルナイン Dhu'l-Qarnain (1) 本角の人) と呼んだり、アル・イスカンドル al-Iskandar と呼んでいたが、千夜一夜物語には六回ほど現われ、そのうちの一回はルーム(ギリシャ)のダーラーン Dārān も呼ばれている。ドゥル・カルナインという呼び方は、中国の文献にも見られる。たとえば南宋の趙汝适

の諸蕃志（一一一五年）の選根陀國（al-Iskandariyah=Alexandria）の條に

「勿斯里（Misr=Egypt）の屬なり。古に異人祖葛尼（Dhu'l-Qarnain）ありて、海に瀕みて大塔を建て、下に地を鑿して回廊と為す。塙結甚だ密なり。一には糧食を蓄（藏）し、一には器械を儲う。塙は高々一百丈、四馬を通じ、齊驅して上り、三分の一に至るべし。塔心に大井を開き、渠（溝）にて結び大江に透（通）らしめ、以て防ぐ。他國の兵侵せば、則ち国を擧げて塔に拠りて以て敵を拒ぐ。上下二万人を容れ、内に居て守り、而して外に出でて戰うべし。其の頂上に鏡あり、極めて大なり。他國、或いは兵船を有して侵犯すれば、鏡先ず照見するにより、即ち、預め守禦之計を備う。近年外国人の為に塔下に投げらる。（其人）執役掃洒數年なれば、人これを疑はず。忽ちに一日、便を得て鏡を盜み抛げて海中に沈めて去る」

と記してある。アレクサン드리アの燈台のあるところは、ゆくは地中海中の島で、Pharos と呼ばれていた。アレクサンドロスが新市街を建設したのは、この島の対岸で古名を Rāqetit (ラケット語名は Rakoti) と呼ぶ古代エジプト人の都市域の隣接地であった。この島と市街とを延長七スタディウムの築堤でつないだのはアントレマイオス一世（在位、西紀前三二二二—二一八五）が、その子アントレマイオス二世（在位、前二一八五—二〇六）の時代で、七スタディウムの長さがあつたため Heptastadium と呼ばれた。パーロス島に有名な燈台が建設されたのも、アレクサンドロス大王の時ではなく、アントレマイオス二世のときで、ソストラトスという人が工事の中心であった。⁽⁹⁾ この島の名はやがてヨーロッパ各国語で燈台を意味する普通名詞ともなつたのであるが、この燈台に關し諸蕃志にある物語は、恐らく當時、泉州などの海港に来た西アジアのイスラム商人などが伝えたものである。アラブやペルシアの史書や地理書にはこの燈台に關する伝説がいろいろと記されていて、かなり、諸蕃志の記述と一致しているように思われる。

諸蕃志には「塔心開大井結渠透大江…」ふう一句があるが、ヒルムとロックヒルは In the centre of the build-

ing was a great well connecting the big river. と英訳している。燈台の中心に井戸をうがち、その井戸がナイル河に通じてゐる。どうもどうよつて受取れるのであるが、大江は河ではなくて、燈台のある島と陸地をへだてる入海のことである。

たとえば台灣の台灣府（今の台南）とオランダ人の築いたゼーランジア城のある七鯤身との間にひろがつてゐる入海を昔は台江と呼んでいた。この場合も江は河ではなくて入海である。もつとも、諸蕃志の著者がアレクサンドリアあたりの地理条件などを如実に知つていたものとも思われず、漠然とナイルの河口に近い所にあつた港町である位の知識しか持つていなかつたのではないかと想像されるから、あまり厳密な穿鑿は無用かもしれない。

ところで、諸蕃志の著者ともして時代を距てていないイスパニアのアラブ系建築家アブール・ハッジャージ・ユースフ・アル・バラウイー Abu'l-Hajjāj Yūsuf al-Balawī は一一六六年にアレクサンドリアを訪れ、燈台の内部を詳しく観察し、測量まで行つてゐる。この人の記録によると、燈台のある島と本土とを繋ぐ堰堤は長さ三一四米、幅は一〇、八〇米、高さは水面から一、六二一米である。海が荒れると堰堤は水中にかくれるので、通行人はくるぶし位まで水につかって徒渉しなければならぬ。塔の内部には螺旋状の廊下があつて、上に上れるようになつてゐるが、廊下の幅は約一、六一米はあるので、騎馬のものが、樂々とすれ違つことが出来るであろう。（…諸蕃志に四馬が並んでゆけるというのは誇張であることがわかる）こうして一階まで上れるが、そこの高さは地面から五六、七三米ある。そこから十八段の階段を上ると、第二階に達する。一階から二階までの高さは一七、四五米である。第二階から第三階まで達するには三十一段の螺旋階段があり、二階から三階までの高さは七、三二一米であつた。三階にはモスクがあるが、その高さは五、四九米、直径は三六、六〇米ある。全部でこの建物には六十七室あつたが、最も下の第一室にのみははいれなかつた。その部屋だけが戸が閉されており、聞くところによると地下道によつて海に通じてゐることであった。燈台の高さは九六、九九米で、

その基礎の所までの水面からの高さは九、一五メートルであるといい、その他にも、燈台の構造についてこまごまと述べている。⁽¹¹⁾

その後この燈台は一三〇三年八月八日の地震で大破した。一三二六年にイブン・バットゥータがここを訪れたときは、その一方の壁が崩れたのみであつたらしいが、長い遍歴の旅を終り、帰国の途次、一三四九年に再びそこに行つて見ると、崩壊が甚しく、もはやその中にははいれぬのみか、入口まで近づくことも出来なかつたといつている。

またこの燈台の頂上にかけられ、敵の近づくのを知らせていたという大鏡のことについては、ウマイヤ朝のカリフ、アル・ワリードのとき（七〇五—七一五）ビザンティウムの皇帝が、心利いた宦官のひとりを、このカリフのもとに入りこませ、姦計を用いて、塔の半分と鏡を破壊させたという伝説があるが、それらのことは、アル・マスウーディーの「黄金の牧場」をはじめ、いろいろの文献に記載されているのである。⁽¹²⁾

またアレクサンドロスが二本角の人と呼ばれたという事についてもその理由につき種々の説が残っている。

アル・マスウーディー（九六五年没）は「黄金の牧場」の中でアレクサンドロスがドウル・カルナイン（二本角）であつたかどうかについても賛否の両説があるが、ドウル・カルナインという言葉の意義についてはさまざまの論議が行われているといい、まず第一説には彼は「大地のはしばしまで遠征したが、その果てにあるカーフの山を守る王（一説には天使）がこの名を彼に与えたからである」とあり、第二説にはアレクサンドロスは金髪を二つにわがねていたからであるといつてゐる。さらに、その他種々の説があるが、イブン・アッバース（預言者マホメットの従兄弟。イスラムの教義に対する学識で第一人者と称せられた）による第一説と、アリー・ブヌ・アビー・ターリブ（預言者マホメットの従兄弟で、その女婿。第四代正統カリフとなる）による第二説などを挙げておくにとどめることにすると断つてゐる。⁽¹³⁾

また前に述べたサアーリビーによると、アレクサンドロスが二本角の人と呼ばれた理由について史家の意見がまちまちであるが、ある人たちによると、大王はある夜、手に二つの日輪を持つていると夢みた。夢占いにはかつたところ、太陽

の照らす限りの世界を支配するに至るであろうと解いた。アラビヤ語で角を意味する qarn は同時にもし上の日輪の意味をも持つ。それで「一本の角」qarnain は一つの日輪の義となるので、それ以来「ドウル・カルナイン」(一本角の人)と呼ばれたといい、また他の人々は、大王がギリシャ地方 Qarn al-Rūm とペルシア地方 Qarn Fārs とを統一したから、二つの地方(角)の人と呼ばれたのであるといつてはいる。しかし、その他の人々は、そうではなくて、アレクサンドロスの頭には全世界の支配者であることを示す特徴たる一本の小さな角が生えていたためであるといつてはいる、とこのように記している。⁽¹⁴⁾

三、ゴグとマゴグの長城

伝説中のアレクサンンドロスは、シナやチベット、極西の国から暗黒の国、ワクワーグの島などあまねくめぐることになつているが、極北の地方に住む蛮族ゴグとマゴグを防ぐために長城を築いた人ということにもなつてはいる。預言者マホメットもアレクサンンドロス伝説をかなり知つていたものと見えて、コーランの中で、この築城のことを物語つてはいる。

同書第十八「洞窟」の章の八二節から九七節までにつきの如く記してある。

「人々がそなた(マホメット)にドウル・カルナインのことを訊ねるであろうが、言うがよい。「では、あなたたちにあの人々の話ををして進ぜましょう」と。……あの人とはひとつ道を辿り、ついにマグリブ(太陽の沈むところ)に至つたが、見れば日輪は煮えたぎる泉の中に沈んでいき、そのほとりに人びとが群れ集つてはいるではないか。(中略)それからあのひとはもう一つの道を辿つて太陽の上る所に至つた。見れば太陽はわれら(アッラー)が身を蔽うべきものをなに一つとして与えなかつた民衆の上にさし上りつつあるではないか。(中略)それからあの人とはまた一つの(北方への)道を辿り、前方を阻みつつそびえる二つの山脈の間に至つた。見ればその下に住民がいるのだが、殆ど(こちらの)いうこと

の）一語をも理解しなかつた。（しかし）彼等がいうことには「なんとデウル・カルナインdein、ほんにヤージュージュ（ゴグ）ヒマージュージュ（マゴグ）とがこの地で勝手な振舞いをしております。貴方さまに御供えものを差上げてもよろしうまいましようか。ひょっとして、あやつらとわたくしの間に長城を造つていただけたらと思つて」するとあの人の言うには「主が賜わつたわが威力の方が（そのような供えものより）よほどましじゃ。だが、せいぜい手伝うてくれい。そなだちとかやつらとの間に長城を築いて進ぜるほどに。鉄の塊を運んで来てくれい。山頂と山頂とが平らに連がつてしまふまでな……」

あの人の言うには「ものども吹けい。火がどつと燃えきかるまでな」

あの人の言うには「溶けた銅を持ってまいれ。あの上に流しかけたいのじゃ」

（かの蛮族どもはあはやこの長城を）乗り越えることも、破れ目を穿つこともできぬようなつてしまつたのであつた。

（下略）……

コーランの中で物語られたいわゆるアレクサンドロス長城のいきやつについては、サアーリビーは「いと高きにいますアッラーがこのように語りたもうた物語には、あはや何ひとつ附け加うべきことはない。その仰せられたことはあくまでも真実で明晰そして要領を尽している」と⁽¹⁵⁾い、これと一致しない内容をもつ報道をしている通訳者サルラーム Sallām at-turjumān のことあるが、少しも信頼をおく価値はない、ともめづけている。この通訳者サルラームのことにつづいては後節でその事蹟を記したいと想つ。

四、マルコ・ポーロの伝えたゴグ・マゴグの長城

マルコ・ポーロは、その書のかなり初めの部分で、デオルジア（グルジャ）人たちの王と、かれらのひとどもに就い

マルコ・ポーロとアレクサンドロス伝説 ト

てとして、いろいろと物語り、つきのようなことを伝えている。

「……このジェオルジアという地方はアレクサンドロス大王が西方に帰つてゆこうとしていた際に、道が狭く危険だつたため、通り抜けることが出来なかつた所である。なぜかというと一方はバクーの海（カスピ海）もう一方は越え難い森林と、馬を駆ることの出来ぬきわめて大きな山だつたからである。この山と海との間に残された通路は、あまりにも狭くて、騎馬でゆくことが出来ぬほどであるし、しかも、そういう隘路が四リーグ（約二十キロ米）も続いている。二人が一緒に並んで進むことはとても不可能で、どちらか一方は海に落ちてしまうにちがいない。それで、ほんの僅の人数をもつて、よく全世界に対してこの道を守り得るであろう。こんなわけでアレクサンドロスは通ることが出なかつたのであつた。

それからアレクサンドロスは、この隘路の出口のところに、まことに堅固な塔と、それから城砦を築かせたが、これはかなたの民が、そこを通つて自分や、自分の人民を襲つてこないようにするがためであつた。それで今日までこの城砦は鉄門と呼ばれている。この場所こそ、アレクサンドロスの書（アレクサンドロス物語）に、いかにして彼がタルタール人を二つの山の間に封じこめてしまつたかを物語つてある、その地なのである。しかし相手をタルタール（モンゴル族）としているのは本當ではなく、コマン（キプチャック族）と呼ばれる民やその他いろいろの民であつた。なぜなら、そのころはまだタルタール人はいなかつたのであるから」⁽¹⁶⁾

この一節でわかるように、アレクサンドロス物語（偽称カリスティネスのアレクサンドロス伝）やコーランその他などに出ているゴグとマゴグを封じこめた城壁というものを、マルコ・ポーロはカスピ海西岸のデルベンド附近の長城にて、ゴグとマゴグは、カフカース地方にいたコマン族やその他の人々であるということにしているのである。

カフカース山地の南端を東西に走り、山地から侵入してくる諸蛮族を防ぐに用いられた長城は、中国の万里の長城など

と共に有名なものであるが、カフカースの山地からグルジヤやアゼルバイジャーン地方に侵入するには西方の黒海岸と、中央のダリアル峠をティフリス（今のトビリシ）に入る途と、それから東方のデルベンド附近の隘路と、この二つのうちのどれかを選ばなければならなかつた。

その中でも最も利用されたのはデルベンド路だつたが、ここはマルコ・ポーロも伝えたごとく天下の要害でもあつた。ここを中心に長城を築いた人として、最も有名なのはサーサーン朝のホスロー・アヌーシルワーン（在位五三一—五七八）で、その築城のことは、フィルダウスイーのシャーナーマなどにも面白く伝えられ、陸地のみでは十分に蛮族の南下を阻止し得ぬので、カスピ海の水中にかなり突き出して城壁をつくつしたことなども詳しく歌われている。

それから一世紀もの後、アッバース朝第二代のカリフ、アル・マンスール（在位七五四—七七五）の時代に、ハザル族 Khazars が北方からティフリス方面に侵入して、大に劫掠を行つた。それで、この有為のカリフは盛に土木を起して、くだんの長城を増築せしめたといわれている。⁽¹⁷⁾

ティフリスの北方、カフカースの山地に通ずる峠路はダリヤル Darial と呼ばれ、カスピ海にのぞむデルベンドの地峡とともに要害の地であつたから、イラン側はここにも守備兵を多数おいて北方からの侵入に備えるのが古来の例であつた。

北方の諸族中、サーサーン朝やカリフ帝国に最も脅威をあたえたのは、トルコ系といわれるハザル Khazar 人で、ヴォルガ下流からドン河流域にかけて勢力を張つており、その首邑はエテル Etel（今のアストラハーン）で、その建国は西紀一九〇年頃のこととされ、一〇一六年にロシア人とビザンツ帝国との連合軍のため潰滅させられるまで、強力な王国を造つていた。ヴォルガをかなり溯つた所に国を建てていたブルタース族やさらに上流域にいたブルガール族などは、このハザルに較べると、よほど微弱なものだったのである。

九世紀のころ、ハザル王国は最も強勢で、西は黒海の北岸をのびてドニエペル河を越して、キエフから遙に西方に達し、

東はアム河あたりまで達していたから、ビザンツ帝国やイスラム帝国との交渉が多く、従つてこの二帝国側の史料にしばしば現われている。ウマイヤ朝やアッバース朝の初期、つまりアラブ族の征服事業が最も活潑に行われていた時期にあつて、その北進をタウロス山脈の線で阻止し小アジアを保全したのはビザンツ帝国であつたが、カフカース山脈の線で食い止めたのは、このハザル族であつたといつてよいであろう。アラブとハザルとの交戦は約一世紀ほども続いたが、もし前者が、この線を突破し得たとすれば、おそらくそれから西に折れて東ヨーロッパを侵略し、ビザンツ帝国は腹背から攻められるの危機にのぞんだのではないかと考えられているのである。⁽¹⁸⁾ ヤアクービーの史書その他によれば、七五八年頃、

このハザル族を押えるため、カリフ、アル・マンスールはアルメニア総督ヤジード Yazīd ibn-Uṣayd を選めて、ハザルの国王の娘を娶らしめた。盛大な結婚式が行われ、ハザルの王女は多数の侍女や奴隸をつれて輿入れして來たが、上質の縄張りの天幕を車の上にしつらえたものが十台もあり、その天幕内の床には黒貂クロテンの毛皮が敷いてあつた。また他の二十台の車上には金や銀のうつわ類その他の貴重品が満載してあつたが、これらが花嫁の持参金がわりであつた。結婚式は今のバクーから西にはいった所にあるバルダア Bardha'ah で行われたのであらうというが、このハザル族の王女は、その後、間もなく男の子を産もうとして死に、嬰児もまた死んでしまつた。王女と一緒に來ていた附人たちは、故郷にもどり、王女はイスラム教徒のため殺されたらしいと報告した。ここにおいてハザルの王は開戦の機が至つたとして、大挙して南下し、ダリアル峠にせまつてきた。つまり、この峠から東のかたデルベンドに至る昔からの長城の線が、アッバース朝初期におけるカリフ帝国の北限だったことがわかるのである。マンスールはその報に接するとシリアや、北部メソポタミアから二万人の軍勢を動員して、アルメニア総督ヤジード・イブン・ウサイドを助けさせたが、戦は利あらず、形勢はいよいよ重大となつて來た。カリフは正規軍が足らぬので、囚人七千人を釈放し、これを武装させて現地に急行させた。また多数の石工その他の工匠を軍中に加え、処々に城砦を築いて、これに鎮兵を配置したから、これでやつとハザ

ル族の南下を食い止めることが出来たといわれている。⁽¹⁹⁾

五、アッバース朝カリフの長城への遣使

このようにカスピ海の西岸デルベンドからさらに西に走る長城のことを、マルコ・ポーロのころには、アレクサンドロスがゴグとマゴグという蛮族を防ぐために築いたものであると思っていたらしいのである。まことに興味が深いのは九世紀の地理学者イブン・フルダードベー（またはフルラダードビフ）Ibn khurradādhbih（八八三年没）の諸道諸国記の中にアッバース朝第九代カリフのアル・ワーシク（在位八四二—八四七）が、このアレクサンドロスの長城の検分のため、かなり大規模な調査団を派遣したという記録が残っていることである。ちなみにイブン・フルダードベーがその地理書を著わしたのは西紀八四六年ころとされているが、その中に次の如く記している。

「通訳者サルラームがこのように私に話した。アル・ワーシク・ビッラーヒ（アッバース朝のカリフ。この人の治下でイブン・フルフダードベーは駅伝局長をつとめ、またその地理書を著わした）には、かのドウル・カルナイン（アレクサンドロス大王）がわれわれとヤージュージュ（ゴグ）およびマージュージュ（マゴグ）との間に築いた長城がうち開かれてしまっているさまを夢に御覧になつた。それで、現地まではるばると赴き、事情を調べて来る人はいないかと探しておいでになつた。そのときアシュナース（チュルク族の将軍）が申上げるには『この任に当るに通訳官サルラームをおいて、ほかにふさわしい者は一人も居りますまい。あの人物はよく三十カ国語を話すことが出来ますので』

いわく、そこで（カリフは）わたくし（サルラーム）を召し寄せて仰せられるには

『その方に長城まで赴いて、目のあたりに取り調べ、情報をもちかえってもらいたいのだ』と。

そしてわたくしに、年若く強力な男たち五十人をあてがい、金貨五万ディーナールを賜い、さらに銀貨一万ディルハム

を危険手当としてお下げ渡しになつた。また五十人の男たちにもそれぞれ一千デイルハムと一年分の食糧を与えよとお命じになつた。また一行の人々のため表を革で被つたフェルトの長衣などを調製するよう命じられた。そのうえ毛皮の鞍かけや、木製の鎧などをもつくるべくあたえるようお命じになつた。また食糧や水を運ぶために二百頭の驃馬をわたくしにお下賜になつた。

そこでわれわれはアル・ワーシク・ビッラーヒ（カリフ）よりアルメニアの領主イスハーカ・ブヌ・イスマーリールにあてた親書をたずさえてスルラ・マン・ラー（当時の都だつたサーマッラー。バグダードの北約百キロほど）を発足したがかの地に着いて見るとその人はティフリス（トビリシ）におられた。このイスハーカさまは、われわれのためにアツ・サリール（王座）の主（アルバニア人の王ともいう）への添書をしたためてくれた。そして、アツ・サリールの主はアルラーン（アラン）人の王にあてて添書をしたためてくれた。するとアルラーンの王はフィーラーン・シャーへの添書をしめたためてくれ、フィーラーン・シャーはやうにハザル族 Khazar の王タルハーンへの添書をしたためてくれた。

それからわれわれはハザル族の王のもとに一昼夜とどまつたが、この王は、われわれに五名の案内人をつけてくれた。それからわれわれは、王のもとから二十六日間旅を続けたのち、大地が黒く、悪臭をはなつところに至つた。しかし、そこにはいつていく前にあらかじめ、悪臭を防ぐための酢の準備をしておいたのである。われわれはそこを十日かかって通りぬけたのち、いくつかの廃墟の町々に達し、それらの間を二十日間旅し続けた。われわれは、なぜこれらの町々はこのような状態になつてゐるかと訊ねて見たところ、これらはゴグやマゴグが劫掠し、荒廃させてしまつたのだと知らされた。それからいくつかの城砦に到達したが、もはやそこはかの山地、つまりその一つの連嶺（または谷間）に問題の城壁のある山地に近かつたのである。それらの城砦にはアラビア語やペルシア語を話す人々がいたが、彼等はイスラム教徒で、コーランを読み、初等学校やモスクなども持つていた。

われわれに対し、一体どこから来たのかと訊ねるので『われわれはアミール・ル・ムウミニーン（信徒の統率者、カリフ）の使者たちである』と答えると、彼等は怪訝な態度で近より、口々に

『アミール・ル・ムウミニーンだつて？』というので

『さよう』と答えると

『その人は老人か、それとも若者か？』と問い合わせて来た。

『お若くていらせられる』と答えると、彼等はまたしても感歎し

『どこにお住いであるか』というので

『イラークの国は、スルラ・マン・ラー（サーマッラー）という都に』と答えたところ、彼等は

『そのような名はまだ一度も聞いたことはない』というのであつた……。

それからあと、サルラームの話はかなり長く続くのであるが、逐語的に訳すことを省略し、大体の内容のみを紹介する
と、つぎの如くである。くだんの城砦はそれぞれ互に一フアルサフから二フアルサフほどの距離をへだてていた。（一フ
アルサフは七キロ余）一行はやがてイーカ Ika という都市に達したが、この町を囲む城壁の諸門は鉄の扉を持ち、それ
を上からおろして閉めるようになっていた。城壁の中には耕地もあれば、水車小屋もあるが、ここはかつてドル・カル
ナイン（アレクサンドロス大王）が軍隊とともに滞在したところであった。ここから、かの長城までは僅に三日行程にす
ぎず、その間にも城砦や村落が続いていた。

そのあたりの山々は輪のようにつらなつていて、そのむこうにゴグとマゴグがいるということであった。彼等は二つの
種族で、ゴグの方がマゴグよりも身長が高いのであるが、そのうちの一方の身長は一ディラアから一ディラア半（一ディ
ラアはイラクでは約〇、五六三メートル）くらいである。それから一行は高山の麓に至つたが、その頂きにも城砦があつ

た。ドウル・カルナインが築いた長城というのは二つの山と山との間にあたるところにあり、その谷間の広さは百五十デイラア（約九〇米ほど）で、ここからゴグとマゴグがはいって来て、地上にはびこったというわけなのである。ドウル・カルナインは長城を築くにあたり、まずその基礎として三十ディラア（約十八米）の深さの坑を掘り、鉄と銅を地表と同じ高さまで埋め、つぎに谷の両がわに幅二十五ディラア（約十五米）高さ五十ディラア（約三十米）という二本の巨柱を立てた。建築の材料にはすべて鉄煉瓦に銅を被せたものをつかつた。二巨柱の間には長さ百二十ディラア（約七十二米）の横桁を渡し、それを支えとして、やはり鉄煉瓦に銅を被せたものを、山頂と同じ高さにまで積みあげたが、その高さは目測によると約六十ディラア（約三十六米）にも達し、三十七カ所に鉄の胸壁が設けてあつた。さて城門には、それぞれ幅が五十ディラア（約三十米）高さも五十ディラア、厚さ五ディラア（約三米）という扉を一枚、左右から取りつけた。貫木は地面から高さ二十五ディラア（約十五米）の高さの所にとりつけてあつたが、大の男が二人でも引き抜くことは出来ぬほどのものであつた。

この城門の近くには二つの城砦があつたが、その守備隊長は、あたかもカリフの職がそうであるように世襲制であつた。毎月曜と木曜日の早朝に三名（別本には十名）の部下を従えて騎馬で出動するが、これらの部下はそれぞれ頸に槌をかけている。その一人は城門にかけた梯子をよじ登り、一番上の段まで至つて、槌で貫木をたたく。すると、まるで雀蜂の巣をつついたような騒音がし、やがてしんとしてしまう。正午ころ、また貫木をたたくが、朝よりももっと高い騒音がきこえる。午後になると三度目に貫木をたたき、例の音をたてる。こうして守備隊長は日没時になつてやつと引きあげる。何故このようなことをするかといふと、城門のかなたにいる蛮族に、衛兵が守備についているぞということを警告するとともに、守備兵たちもゴグやマゴグが城壁に何の害も加えなかつたかどうかを確認するためなのである。サルラームは居あわせた守備隊の人々にむかって、城門が何かの損害を受けたことはなかつたかと問いただしてみた。するとその人たちが

答えるには「やよう、この割田の外には何の損害も受けたことはない」というのであつたが、その割田というのは、ほんの糸一筋ばかりの細さにすぎなかつた。「城門には何の心配もないか」と訊ねてみると、一同は「ありません。この城門の厚さはイスカンダル（アレクサンドロス）ディラアで五ディラアもあるから」と答えたが、イスカンダル・ディラアはイラクのそれの一倍半にあたるのである。（注、イラクのディラアは約〇、五六三米）そこでサルラームは長靴の中から小刀をとり出して、その割れ目のところを削り、約半ディルハム（約一グラム半）の鉄粉をハンカチに包んだが、（カリフ）アル・ワーシク・ビッラーヒの御覽に入れるためであつた。

城門の右扉の一番上のところには鉄の文字で、古代の言葉を用い「主の約束の実現されるとき、これは粉碎されん。主の約束は確実なり」と書いてあつた。

また城壁の構造をよく見ると、黄色い銅の層と黒い鉄の層とが交互に積みあげられ、縞模様を示しているのであつた。守備兵たちにゴグやマゴグの類を目撃したことがあるかと訊ねて見たところ、かつて彼等の多数が山上に立っているのを見たが、強風が吹いて、むこうに吹きとばしてしまつた。ここからでは、彼等の身長は一シャブル半（約三、八一センチ）ほどにしか見えなかつたと語つた。その山というのは、全くの禿山で、木も草もなく荒涼として白い色をしているのである。

そのあと、サルラームは長城からの帰路のことにつきの如く記している。

「その地を去るにあたつては、案内人に導かれてホラーサーンの方向に志した。ひとつずつ国を通つたが、その王の名をアル・ルブ（Lub 又は Lub）といった。その地を去り、タバー・ノヤン Tabā Noyan という王の領地にはいったが、この王は（カリフに）納稅している。この人々のもとに数日間滞在したのち、再び旅路につき八ヶ月を費してサマルカンドに着いた。われわれはイスビージャーブ（イスビージャーブ）をすぎ、バルフ河（アム河）を渡り、ウシユルーサナに

至り、さらにブハーラーに至り、ティルミドに至つた。（注・この行程は少し混乱しているが、イドリースイーの地理書では同じくサルラームの遣使行のことを記して、イスビージャーブーシュルーサナーサマルカンドーブハーラー・ティルミドニーシャープールという順に戻つて来たと記している。これが順路であり、イブン・フルダードベーの記録の方はやや混乱している）とにかく、このような経路でホラーサーンのニーシャープールに着いたが、そのときまでに行を共にして来た人々の中には死亡したものもあつたし、道中で病に倒れたものが二十四人もあつた。病死したものは、その衣類に包んで埋葬し、病者は所在の村落に残して來た。帰路のみで十四人も死に、ニーシャープールに着いたときは、一行は十四人のみになつていた。

各城砦の守備隊長は、われわれに充分な食糧をわけてくれていた。（ニーシャープールでは）われわれはアブドッラー・イブン・ターヒル（註。ホラーサーンの領主。ターヒル朝第三代の主で、在位は八二八一八四年）のもとに出頭すると、わたくし（サルラーム）には八千デイルハムを、一行の人たちには一人につき五百デイルハムを給してくれたうえ、ライイ（今のテヘランの近くで、当時ターヒル朝の領土の西のはてであつた）に到着するまで、一行中の騎士たちには五デイルハム、歩卒には二デイルハムの日当を支給してくれた。当初、連れていつた駒馬のうち、無事だったのは二十三頭だけであつた。

われわれはスルラ・マン・ラーに帰還し、アル・ワーシクの御前に出て、一部始終の報告をし、かの城門から削りとつて来た鉄を御覽に入れたところ、カリフにはアッラーをほめたたえ、貧者に施しを領ちあたえるようと命じられた。また一行の人々にはそれぞれに金一千ディーナールをたまわつた。

われわれは長城まで行きつくるに十六ヶ月を費し、帰路には十二ヶ月と数日を要したのである⁽²⁰⁾」

そのあとにイブン・フルダードベーは「通訳官サルラームははじめ、私にこの報告の大体を話してくれたのであるが、

そののち、アル・ワーシク・ビッラーヒのために書き記した彼の報告書そのものに基いて口述してくれたのである」と附記して、右の旅行記が確実なものであることを断つている。

六、サルラーム等の行程についての諸説

右に記したことく、アッバース朝のカリフ・アル・ワーシクのとき、通訳官サルラーム等がアレクサンドロスの城壁を視察して房ってきたという話は、かなり確実なソースから出ているのであるが、サルラームが検分して来たという城壁が後世にマルコ・ポーロが指摘したようなグルジャとカフカースの境界にあるものでないことは、行きに十六カ月、戻りに十二カ月を費やしたということをもっても明かであるし、帰りにはサマルカンドやブハーラーを通ってニーシャープール、ライイという経路をとっていることからも、よほど東方はるかの地域まで赴いたことがわかるのである。そうすると、この長城は中国の万里の長城ではないかということになるが、それにしては、実際の万里の長城と、このサルラームの話に出てくるものとは大部様子が違つているのはどうしたことであろうか。

アレクサンドロスの長城が、マルコ・ポーロがそう信じていたようにグルジャの北境のものではなく、中国の北境にあるものであるというような説は、イスラム世界ではかなり行われていたらしい。十世紀前半のクダーマ・イブン・ジャアファル（九五八年没）はバグダードに住み、キリスト教からイスラムに改宗した学者であるが、その「^{ハラージ}地租の書」の中で、ドウル・カルナイン（アレクサンドロス）はチベット、シナ、トルコ族の国などに遠征し、北東のはてに、しばしば侵入してくるトルコ族を防ぐために長城を築いたが、これこそアッラーがコーザンの中で告げたもうたものであるといつている。⁽²¹⁾これは漠然とながら万里の長城のことを意味しているのであろう。

また前にひいたイブン・フルダードベーの地理書中の記載と同じサルラーム等の遣使行のことが、イドリースイー (Abū

'Abdallah Muhammad al-Idrisi | ○九九年にセウタで生れ、一一六六年没) の地理書にも出ているが、その中にはイブン・フルダードベーの書にはない若干の記載もあり、旅行日程や、通過地の順序など、両者の間にはかなりの異同が見られるのである。これはどういうわけであるかと云ふと、この点につき C. E. Wilson は、イドリースイーの書に(第六氣候帶の部分で)

「ゴグとマゴグの長城のことは諸書にその記載があつて、その話は事実であることが次々と確証されている。通訳官サルラームが報告したことはアブドッラー・イブン・フルダードベーがその書の中で伝えている。また同じことをアブー・ナスル・アッ・ジャイハーニー Abū Ṯaṣr aj-Jaiḥānī も記している」

という一節があるところから、イブン・フルダードベーと相違している箇条は恐らく、アッ・ジャイハーニーの書から引用したものと思われるが、不幸にしてこの書は現存していないと述べている。⁽²²⁾

アッ・ジャイハーニーは九一十世紀の人、ブハーラーに都したサーマーン朝の大臣を八九二年から九〇七年頃まで勤めた人で、クダーマの「地租書」を基として、詳細な地理書を書いたが、今は伝わらぬということになつてゐる。その稿本がイランのマシュハド(メシェッド)で発見されたという報告も出たが、結局、誤報であつたとブロッケルマンは記している。⁽²³⁾

サルラーム等が調査したのは中国の万里の長城のことであり、大きな城門というのは玉門関のことであろうという説を出したのはオランダのド・フュー教授であるが、ウィルスンはこれに反対している。反対の論拠はいろいろあるようであるが主なものを挙げると

一、サルラームの報告ではアレクサンドロスの築いた城壁を見たといつてゐるけれども、ただ一つの堅固な門があることと述べただけで、延長千五百哩にも及ぶ万里の長城の実際を見てきた人の報告とは、とても思えない。

二、万里の長城は北緯四十度よりやや北方にあるが、サルラームの一行はカフカースを越えて北に進み、少くとも北緯五十度辺まで行つて、それから東に向つたように受取れる。

三、サルラームの一行は黒く臭い土壤の地域に至つたとあり、ド・フューユは「これは特にバルカシユ湖附近に求めらるべきである」と述べているが、この悪臭はキルギーズ・ステップなどに多いアサフェティダ（薬用植物アギ）が乾いたものから発する臭氣と思われるから、バルカシユ湖よりもっと北方の地域を通つて行つたのにはちがない。黒い粘泥はシリアの草原地帯によく見られるものである。

四、サルラームの一行は長城に着く途中でイーカ ika という町に至つたとあるが、ド・フューユはこれを東トルキスタンの伊吾（ハミ）に比定しているが、それを証明すべき材料は見あたらぬ。

五、一行が帰途、アル・ルブ（またはロブ）という王の領地を通つたとあるのを、ド・フューユは恐らくは東トルキスタンのロブ・ノール Lob-Nor の地方に至つたもので、ロブ・ノールという名も王の名から出たものであろうという考を述べた。またイブン・フルダードベーにはその記載はないが、イドリースィーによると、サルラームの一行はサマルカンドまで戻つてくる途中でグーラーン Ghurān（またはガウラーン Ghaurān）という町を通過している。これはロブ・ノールの近くの楼蘭に違いないというのが、ド・フューユの意見である。この二つの比定もみな行き過ぎと思われる。

六、ド・フューユはタバー・ノヤンという王がいた国をタクラマカンの南の名邑ホタン Khotan に比定しているが、これも納得し難い。²⁵⁾

右のごとくウィルスンは、ド・フューユが、サルラームの一行は万里の長城の西端あたりまで赴いたのであろうとした説を、かなり詳しく反駁している。しかし、ウィルスンの反対の根拠にも、かなり幼稚ときえ思われる点が少くない。もちろん、ド・フューユの説にもかなり飛躍が多いのであるが、ウィルスンの駁論も決して周到なものとは思われない。

それではウイルスンその人はどのような考を持つていたのであるかといふと、大体つきのようなものである。

まずサルラームの一一行はサーマツラームを出発して、アルメニアに至り、北進してカフカースの山地をぬけて、ヴォルガ河の下流域に出、東に進んでバルカシュ湖の北方の草原地帯を通つて、サン山脈の南方、イェニセイ河の流域に至つたというのである。イブン・フルダードベーは、ゴグとマゴグとを封じこめた山の、こちら側にいた住民の名を明記していないが、イドリースイーはアドカシユ・チュルク Adkash Turks と呼んでゐる。ウイルスンの考では、この部族はイニセイ河以東のサン山脈の南麓にわたつて住み、東はコッソー・ゴル Kosso-gol (Kosso-köl) という湖水あたりまで及んでいたものであらうといふ。この湖水はイドリースイーがタハーマ Tahāma と呼んでいるもので、その東方約九キロほどのところにジャルダー Jardā という禿山があるが、イドリースイーはこの山からゴグとマゴグが封じこめられたコカヤ Kokaya 山脈までは七日行程であるといつてゐる。七日行程を約百八十キロと見ると、コッソー・ゴルから東方にそれ位進んだところはバイカル湖南方の山地にあたる。

このような見地からゴグとマゴグを封じこめていた線とはヤブロノイ山脈の北端から、この山脈にそつて西南に下り、北緯五十度あたりにまで至つてから、北西に折れてバイカル湖の西南端に至り、それからこの湖水の西岸に沿つて、湖の東北角に至るもので、その北側がゴグとマゴグの領域であったと思われる。アレクサンドロスの長城というのは、つまりヤブロノイ山脈の一部で、バイカル湖の南方、コッソー・ゴルから東へ百八十キロほどの地点にあつたものであらう。

ゴグとマゴグとがピグミーのように矮小な人種だったといふは、ウイルスンの考では、この地域に出没した日本人を見かけたことによるのであらうし、また毛髪に蔽われた人を見たといつてゐるが、これは恐らく樺太方面から来たアイヌ族であつたろうといふのである。⁽²⁶⁾

ド・フューやウイルスンの外に、サルラームがどこまで至つたかについて意見を示した学者が数人あるようで、その一

人たるトルコのゼキ・ヴァリディ・トガン教授は天山方面のクルジャの北の鉄門（タルカ）であつたろうといい、マルクアルトはド・フュユと同じく万里の長城であらうといい、⁽²⁸⁾ハンガリアの E. Zichy はウラル山中の峠の一つであらうといふ意見を発表している。⁽²⁹⁾

サルラーム等がカリフ、アル・ワーシクにより、アレクサンドロスがゴグやマゴグの類を封じこめた長城が破れていはしまいかと、それを確めるために、はるばると派遣されたということまでを否定することは困難のようである。その理由は、サルラームその人から直接に報告を聞いたイブン・フルダードベーの記録があるからである。

またその長城がサーマッラーの都から、そんなに離れていないグルジャの北辺などのものではなく、もつと遠い所にあるということは、アル・ワーシクはじめ当時の人たちはよく心得ていたのである。コーラン第二十一章（預言者）第九五ー九六節には「われら（アッラー）がひとたび滅ぼした町にその住民たちがまた戻ることは禁断である。それより先にヤージュージュ（ゴグ）とマージュージュ（マゴグ）が解きはなれ、高み高みから逆落しに押し寄せてくるであろう」と最後の審判の日の恐怖を説いてある。最後の審判の日こそ、イスラムの教えで最も重きをくところで、そのときゴグとマゴグとは大きな働きをするのであるから、これらを食い止めているアレクサンドロスの長城は、いわば人類の生命線とも考えられていた。とても、ひとつの伝説として、片づけられるようなものではなかつたのである。

アル・ワーシクがこの城壁へ検分の使節を出した動機は、かりそめの一晩の夢からであったというのであるが、昔の人々が夢見というものを真剣に考え、なにか極めて靈妙なもの、また未来のことどもを預言するというような場合も多いと信じていたことは、東西にわたり無数の文献にその証拠が示されている。夢占いといふことも昔から盛に行われ、アレクサンドロスなども東方遠征には、夢占師を同伴していたという記録がある。

このような事情ゆえ、世界のイスラム教徒の全体を統率すべきカリフとして、アル・ワーシクが、コーランにも説かれ

たかの長城が破れたという夢を見たとすれば、これは大に憂慮するのが当然のこととしなければならぬ。

ダンロップは、別の説をたててつぎのように述べている。すなわち、アル・ワーシクがカリフの位に就いた八四一年より少しく前の八四〇年に内陸アジアには大変動が起つた。それは今までモンゴリアの支配者として強盛を誇っていたウイグル族の間に内乱が起つたのに乘じ、その北方イェニセイ河上流域にいたキルギーズ族が南下し、回紇の可汗を殺し、その諸部を或は天山の北部へ、或は甘肅の西部へと走らせたが、これは高原アジアの真中に起つたかなり大きな民族移動であつた。このような動きについての風評は、もちろん西方のアッバース帝国にも達したのであろうから、時のカリフ、アル・ワーシクは、その実情を調べるためサルラームの一行を派遣したのではなかつたろうかといつている。⁽³⁰⁾

そもそもアラブ軍がはじめてカフカース地方まで迫つたのは、メディナ第二代のカリフ、オマルのときで、六四一年かまたはそれよりやや早いころであつたろうという。今のデルベンドの町（アラブ人はバーブ・アル・アブワーブ Bāb al-Abwāb と呼んでいるが門中の門の義で、天下第一閥といつてゐる）に最初に派遣されたアラブ軍の将はブカイル・イブン・アブドッラー Bukayr ibn-'Abdullāh でその派遣は六四一年であつた。⁽³¹⁾ つづいて次の年スラーカ・イブン・アムル Surāqah ibn-'Amr の率いる軍が同地に送りこまれたが、同軍の先鋒部隊の将はアブドル・ラフマーン・イブン・ラビア 'Abd al-Rahmān ibn-Rabi'ah al-Bāhili であつた。このアブドル・ラフマーンがデルベンドにはいると、そこにはサーリーン朝ペルシアから派遣されていたペルシア人シャハルバラーズ Shahrbarāz (資料によりシャハリヤール Shahrīyār ともある) という將軍がいて、アラブ軍の保護を求めた。タバリーの書によると、そうこうしているうちに、このシャハルバラーズが、これより先に派遣していた一人の使節がデルベンドにもどつて来たのであるが、この使節というのは実はドウル・カルナインが築いたという長城を調査して來たもので、その見とびけて來たところをアブドル・ラフマーン等の居るところで報告したといつている。⁽³²⁾

この報告は、サルラームの報告ほどに詳細ではないけれども、大体似かよつたものである。つまり、いくつかの国の人たちが、つぎつぎと他の国の王にこの使者のことを依頼して送りとどけてくれ、ついにかのサッド（城壁）のある国の人もとに到ることが出来たのである。そしてその城壁はやはり黒い鉄の層と、黄色い銅の層が交互に積み重なっていたし、証拠として、鉄を削り取って持つて帰つたともいっている。⁽³³⁾

右のことを伝えたタバリーについては、あらためていうまでもないが、八三六年に、タバリスター（今のマーザンダラーン）のアムルに生れた人で、シリア、エジプトその他に遊学したのち、バグダードに定住し、イスラームの伝承や法学などを教授するかたわら、驚くべき量の著述を残した碩学である。その世界史（預言者たちや帝王たちの書）を完成したのは、西紀九一五年頃とされているが、没年は九二三年のことであった。されば、その書は、イブン・フルダードベーのものよりも、かなり遅れて書かれたものであるが、彼の伝えたところをそのままに受取るならば、シャハルバラーズの使者がアレクサンドロスの長城を視察に行つたのは、サルラームの一⁽³⁴⁾行が赴いたのよりも百年あまりも早いことになる。

いなダミーリーの動物誌によると、はやく預言者マホメットの時にすでに、この長城を見て来たアラブ人があるというのである。ダミーリーは一三四四年頃に生れ、一四〇五年に世を去つたエジプトの学者であり、イスラームの伝承、古詩、格言などについて広汎な知識を持つていた人である。しかし、このような伝えがどこまで史実と関係があるかは甚だ疑問である。

イスラム帝国が起つて以来、かなり早くからカリフの使者というものが、唐の都長安を訪れている。通典（卷一九三）や冊府元龜その他によれば第三代カリフ・オスマーンの使者は高宗の永徽二年（六五一年）に長安に來たとある。その後、しばしば、かの国の使者が來たとあるし、商人たちの往来もかなりあつたのであるから中国北辺の長城のことが、西アジア方面でもある程度まで知られていたらうとは当然考えられることである。それらの知識と、コーランなどに出ているド

ウル・カルナインの長城とが結び合われぬところの大にあり得ぬことと思われる。サンクームの一行為果して、万里の長城まで来たかいかは以上の資料のみでは充分にはわからぬのであるが、頗るこの長城の話にヒントを得てその報告書をへくしたものかと思われる。

マルコ・ポーロが、アヤルベイジヤンやグルジヤの北辺、カフカースとの境にある城を、ウル・カルナインのものであるとするのは何故であるか。おもい、ポーロがイランを旅行したといふのが地図では、その多くはトルクサーンズロスの長城伝説について語り出されるけれどもたぬじぬ。あれど、それがまたリビド、トルクサヌロス伝説研究上は貴重な資料を提供してゐると思つてもつか思われる。

補

- (一) H. Yule, *The Book of Ser Marco Polo*, 3rd edition, London 1926, vol. 1. Introduction p. 113.
- (二) Cary, George, *The Medieval Alexander*, edited by D. J. A. Ross, Cambridge 1956.
- (三) Ibid., pp. 9-11.
- (四) Pelliot, Paul, *Notes on Marco Polo*. vol. 1., pp 27-28.
- (五) Cary, *Medieval Alexander*, p. 11.
- (六) Budge, E. A. Wallis, *The Alexander book in Ethiopia. The Ethiopic versions of Pseudo-Callisthenes*, London, 1933.
- (七) Yule, *Marco Polo*. vol. 1. Introduction p. 114.
- (八) Budge, E. A. Wallis, *Handbook for Egypt and the Sudān*, London 1921, pp. 121, 123-24.
- (九) Nöideke, *Beiträge zur Geschichte des Alexander-romans*. (*Denkschr. der Kais. Ak. d. Wiss., Ph.-hist. Cl.*, vol. 38, Wien, 1890)
- (十) Lévi, Sylvain, *Alexandrie dans les documents indiens*. (*Mémorial Sylvain Lévi*, 1937 Paris, p. 414.
- (十一) Bernard, André, *Alexandrie la Grande*, Paris, 1966, pp. 106-108.
- (十二) Mas'ūdī, *Les Prairies d'Or*, traduction française de Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, revue et

corrigée par Charles Pellat, Tome II, pp. 317-319.

(23) al-Mas'ūdī, Murūj adh-Dhahab, Cairo 1964, vol. 1. p.

288.

(24) ath-Tha'alibī, Histoire des Rois des Perses, texte

arabe publié et traduit par H. Zotenberg, Paris 1900,

(1963 Tehran), p. 442.

(25) Ibid., p. 440.

(26) Marco Polo, La Description du Monde, texte intégral en Français moderne avec introduction et notes par Louis Hambis, Paris 1955, p. 24.

(27) Warner A. G. and Warner E., The Sháhnáma of Firdausī, vol. 1, London 1905, Introduction pp. 16-17.

(28) Dunlop, D. M., The history of the Jewish Khazars, Princeton 1954, Introduction p. IX.

(29) Ibid., pp. 179-181.

(30) Ibn Khurdādhbih, Kitāb al-Masālk wa'l-Mamālik,

(B.A.G.) Leiden 1889, pp. 162-170. Ibid., traduction par C. Barbier de Meynard, pp. 124-131.

(31) Qudāma b. Ja'far, Kitāb al-Kharāj, Leiden 1889, Bibliotheca Geographorum Arabicorum, p. 265.

(32) Wilson, C. E., The wall of Alexander against Gog and Magog (Hirth Anniversary Volume of Asia Major) Leipzig 1923, pp. 25-26.

(33) Brockelmann, C., Geschichte der Arabischen Lit-

teratur, Supplementband 1, Leiden 1937, p. 407.

(34) ルスラーンの羅馬の母國アラブ半島の歴史と文化

アラブ半島の歴史と文化

De Goeje, De muur van Gog en Magog.

(35) Wilson, C. E., The wall of Alexander..., pp. 26-36.

(36) Ibid., pp. 31-36.

(37) Zeki Validi Togan; Ibn Fadlān's Reisebericht.

(Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XXIV, 1939, p. 196 n. ルスラーンの母國アラブ半島の歴史と文化

アラブ半島の歴史と文化

(38) Marquart, J., Osteuropäische und Ostasiatische Streifzüge, Leipzig 1903, p. 86.

(39) Zichy, F., Le voyage de Sallām l'interprète, (Körös Csoma-Archivum, 1, pp. 193-194) ルスラーンの羅馬の母國アラブ半島の歴史と文化

Dunlop, The history of the Jewish Khazars, p. 193, note 121 ルスラーンの羅馬の母國アラブ半島の歴史と文化

(40) Dunlop, D. M., The history of the Jewish Khazars, p. 192.

(41) Ibid., p. 47.

(42) At-Tabarī, Ta'rīkh ar-Rusul wa'l-Mulūk, De Goeje's edition, Leiden 1964, Prima Series, V., pp. 2669-2671.

(43) Ibid., p. 2671.

(34) ad-Damīrī, Ḥayāt al-Ḥayawān, Cairo 1868, Yājūj wa-Mājūj の項。

附記。この稿は本年一月に書きあげたが、三月末に至りて筆者は、モスクワより空路、カフカース地方を経てグルジヤの首府トビリシ（トイフリス）に至り、またサマルカンドやバルカシュ湖、キルギズ草原、バイカル湖方面をも一瞥する機会を得た。ただしデルベンドの地峡まで行を延すこととは出来なかつた。トビリシで筆者が訊ねた限りでは、マルコ・ポーロが伝えた長城の話は殆ど人々から忘れ去られている如く見受けられた。